論文要約

空想に関する現象学的考察――フッサールにおける空想理論の再構成

田中　俊

本論の目的はフッサールの現象学的手法を用いて空想を記述することで、その事象に即した姿を明らかにすることである。これはまた、空想というものの記述分析からフッサール現象学を再構成する試みであるとも言いうる。というのは、空想の構造を解明することに伴い二つの成果が得られるからである。その成果とは、第一に、自由変更の議論において果たして空想がフッサールによって求められた役割を果たしうるのか否かを明らかにすることであり、そして第二に、捉えどころのない「現実」というものの姿をそれと相反する空想というものとの対比によって際立てることである。

こうした成果を意識する場合に問題となるのは、次のことである。第一の点に関しては、フッサールによれば自由変更における空想対象は事実的な束縛から解放された自由で純粋な可能性と見なされるのだが、この見方が問題になる。つまり、こうした純粋さは空想を事象的に見た場合には認められない性格であり、現象学からの無理な要請に過ぎないという可能性がある。第二の点に関しては、フッサール現象学はある種の現実に基づかせることで、その他の体験や理論の正当性を認めるという構造を持つのであるが、この現実というものに関する説明は不明瞭である。そのため、空想という非現実の構造を解明することを通じて、空想の探究を可能にしているところの現象学が根拠とする現実と、そうではない現実との区別を明確にし、両者が混同されないよう整備する余地がある。

空想とは一般に現実との対比において語られるものである。そのため本考察においてはまず、現実というものはいかなるものなのかという点から明らかにしていく。というのも、現実と呼ばれるものは多義的であるため、そのいずれに対応する非現実であると考えるかによって、空想の意味も大きく変わるからである。

そこで本稿ではまず、最古の哲学史家アリストテレスによる現実の分析に注目することで、現実という概念を原点から見直す。それによると、現実には潜在性に対する顕在性という意味をはじめ多くの意味が見出されるのであるが、最も明確な規定として、「運動」と狭義のエネルゲイアの区別が登場する。両者はそれぞれ、次のように規定される。即ち、前者の特徴は「未完了的」という点にある。つまり運動においては、その行為を行っているということが未だ目的を達成していないということを意味している。これに対して、行

為の内に目的が含まれており、常に既に完了的であるとされるのがエネルゲイアである。「見る」という行為であれば、「見ている」という進行形で語るときでも既に「見終わった」という完了形で語ることができる。実際、「見ている」ときには、いつでも「見終わった」と言うことができ、またそれ故「見終わった」後も見続けることができる。そしてこの自らの内に目的が含まれているという在り方には更に、二つの区分に接続される可能性がある。それは能力を発揮している状態と、能力を保持しているだけの状態である。

この現実区分に重ね合わせる形でフッサールにおける現実を解釈する。すると、フッサールが「現実」と呼ぶものにも大きく分けて二つあり、それぞれ「推定的現実」と「絶対的現実」と呼ばれることが明らかになる。前者は対象が経験の進行において斉一的であるということでもって現実と見なされている対象のことであり、後者は、常に何かしらが見えてしまっているとう事実を指すものである。この両者はそれぞれ、恒常的かつ例外なく成立するものであるか否かという点でもって性格づけられている。即ち、推定的現実は体験を進行にするにつれて斉一的でなくなるという点から偶然的と見なされる一方で、絶対的現実は既に見えてしまっている以上、その現実が成立していないという事態があり得ないという点で必然的と見なされる。この必然性のため、絶対的現実は発揮されたりされなかったりするようなものではあり得ない。この点は根元臆見との対比において重要となる。

以上の現実区分を踏まえた上で、フッサールが空想にいかなる本質的特徴を見出したのか、という点を『イデーンⅠ』における中立性の議論をもとに明らかにする。そこでフッサールが明確にするのは、空想は意識から独立した物体の不在や明瞭性の強弱によって規定され得るものではない、という点である。というのは、物体に関しては志向性の概念からして思考不可能なものであり、明瞭性に関しては空想対象にも地平が伴っているという点から、空想内部での区別に過ぎないからである。

では、中立性とはどのような性格であるかと言えば、それは現実化する根元臆見のはたらきを無力化したものであり、「擬似」という性格で表される。この擬似的な性格を持つものは何らの正当性も要求しないという点で、現実的な妥当性があるとは見なされない。そしてこうした中立性への変様がとりわけ想起において行われた場合に、空想となるとフッサールは述べる。

以上のように説明される中立性であるが、ここで二つの疑問が生じる。第一に、この空想はどのようにして発生したのか、という疑問である。たしかに空想は自発的に考え出されることはあるかもしれないが、しかし大抵の場合は、気が付かない内に発生してしまっ

ているものである。このような空想の発生はいかにして説明され得るのか。

空想がいかに発生するのかというこの疑問に関しては、連想という機能から説明が与えられる。『経験と判断』の記述によれば、感覚が与えられるときには常に二つの連想が働いているという。一つ目の連想は、触発によって与えられた感覚は、常に際立て構造に則り与えられている。何かが際立つとは、その感覚野の中にある諸要素が互いに間に類縁性と対称を持つことによって可能になっている。そしてもう一つの連想とは、その感覚が過去の対象を、時間地平の順序を飛び越えて呼び覚ますはたらきである。フッサールによれば、この二つ目の連想が中立化することによって空想が発生すると説明される。連想はいずれも受動性の次元、即ち、先意志的な次元におけるはたらきであるので、この仕方で発生した空想は先意志的にいつの間にか発生していた、という在り方を呈することになる。

第二に、根元臆見の中立化として説明される空想であるが、これは現象学的構図においてどのように説明されるのか、という疑問がある。これは逆に言えば、現実的な妥当性とは現象学的にどのような構造に即して語られているのか、ということである。

根元臆見を更に解明すると、それは端的に与えられる絶対的基体を受動性の次元において与えるはたらきであると定義される。そして端的に与えられる絶対的基体とは、個体のことである。これを中立化することによって生じた擬似個体が空想対象である。

しかし以上のことから言えるのは、空想は事実の束縛から自由ではあり得ないということである。というのも、上の説明によれば空想は現実的感覚からの呼び覚ましを経由しなければ発生し得ないからである。また空想対象は擬似的とはいえ個体である。個体化されている以上、それは本質として認められるものではない。

そして、第一の疑問が明らかになった上で更にある考察の余地が生じる。それは、根元臆見が与える現実が空想に先立っているということに関してフッサールは何の根拠も与えられていないのではないか、という疑問である。たしかに、空想は空想体験である以上、何らかのものが見えているという絶対的現実としての事実性から逸脱するものでは既に常にあり得ない。しかし他方、根元臆見によって与えられる現実は、中立化によってその成立が阻害され得るものであり、常に発揮されているとは限らない。この点で、根元臆見がもたらす現実は、絶対的現実ではない。従って中立的な空想は、絶対的現実に先立つことはないが、根元臆見に先立って成立するという可能性は認められるだろう。